



清新二中だより

本校教育目標

- 1 豊かな心で、互いに敬愛できる人（敬愛）
- 2 進んで学び、深く考える人（知性）
- 3 健康で明るく、自ら鍛える人（健康）
- 4 責任を重んじ、勤労を尊ぶ人（責任）
- 5 礼儀を重んじ、他とよい関係を築く人（礼節）

子どもは我が師？ -第36回運動会-

校長 白石 亨

「犬は我が友、妻は我が敵、子どもは我が師」。

古くから南米アルゼンチンには、この諺が伝わっている。これをお読みのお母様方の多くは「ンマーッ！」と眉間にしわをよせ、少なからずアルゼンチンが嫌いになったかもしれない。しかしお許し願いたい。妻が敵などと堂々と言っているのは逆説的な愛情表現だと思われる。もし本当に敵だとしたら、とてもではないがこのようなことは言えない。また「犬は我が友」と言いたい気持ちはよく分かる。しかし、最後の「子どもは我が師」という部分だけは、今ひとつピンとこない人も多いのではないであろうか。「老いては子に従え」という言葉はあるが、今これをお読みの保護者の方々はまだお若く、中学生の我が子を師として仰ぐことができるであろうか。だが今回、本校運動会を開催するにあたって…ああっそうか、そういう意味なのか…と実感させられた。

5月中旬、全校生徒による「ソーラン節」の練習がスタートした。

3年生の実行委員が前に出てきて、同級生・下級生を目の前にして「観覧車に届くような声でがんばろう！」と強く言い放った。「葛西臨海公園の観覧車まで届くような大きな声を出そう」という意味であることがすぐに理解できた。この声は3年生全員の気持ちを代表するものだった。今まで先輩方の勇ましいソーラン節の舞を幾度となく目にしてきた3年生。今度は自分たちがその主役になるんだという決意表明だった。

この言葉のとおり、初夏を思わせる強い日差しの中でも3年生は頑張っていた。何度も何度も繰り返し踊り込んでいた。思うように踊れない友達に対して、仲間が励まし続けていた。全員で最高のソーラン節を創り上げるのだという意気込みがみなぎっていた。仲間と供に大きな課題を乗り越えようと懸命に汗を流し続けていた。

また、運動会の朝練習は本番の2週間前から開始されたが、多くの生徒が早起きして参加していた。

その中には足に怪我をして松葉杖をつきながらも朝練習に参加していた生徒がいる。翌日も、翌々日も…。もちろん競技の練習はできないが、きっちりと朝練習の時間に登校していた。この生徒に「残念だけど…怪我だと競技には出場できないね…」と声を掛けると、生徒は「…でも僕はクラスの応援団長です！」と晴れやかな声で答えてくれた。その顔は生き生きとして一点の曇りもなかった。クラスのために、今、自分ができることを考え、少しでも仲間のために役立ちたいとの気持ちが朝練習に参加させ、級友に声援を送らせていた。

恥ずかしながら、自分だったら、このような行動・対応がとれるであろうか…と、自問させられた。

そう、子供たちは成長する過程で様々な困難にぶつかる。しかし、そのつど子供たちは自分の力で課題を乗り越えて必死に頑張ることができる。特に運動会においては、運動が得意な生徒ばかりではない。運動を苦手とする生徒も大勢いる。しかし、それぞれが、それぞれの立場でしっかりと課題に立ち向かってきている。

このような場面をとおして、子供たちは大人に、純粹に無垢に頑張っていた頃の自分を思い出させてくれる。初心を思い出させてくれる。かつて自分自身がどんなふうに課題に向き合ってきたのかを…。

過去の自分を振り返り、今の自分を見つめ直す機会を与えてくれるからこそ、子どもは我が師なのだと思う。アルゼンチンの古くからの先輩諸氏はこのことが言いたかったのであろう。またこのことは教員にとっても同様だ。生徒が真剣に頑張る姿こそ、教員としての力量を高めていく糧となっていく。

いよいよ6月3日（土）は第36回運動会だ。一心不乱に頑張る生徒に、熱い声援を送っていただきたい。